

## 2014年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

新生児期に手術を必要とする子どもの家族への看護

学位の種類: 修士 ( 看護 学)

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程人間健康科学専攻 看護科学域

学修番号: 13894608

氏名: 中嶋 佳奈子

(指導教員名: 飯村直子教授 )

注: 1ページあたり1,000字程度(英語の場合300ワード程度)で、本様式1~2ページ(A4版)程度とする。

背景と目的: 家族にとって、生まれたばかりの子どもに疾患があり、手術が必要であると知ることはとても大きな衝撃である。家族は子どもが手術を受けることへの衝撃を医療者など周囲の人からの支えによって和らげており、看護師の存在は重要であるが、直接看護師に何を考え、どのような実践を行っているのかを明らかにした研究がほとんどない。そのため、新生児期に手術を必要とする子どもの家族に対し、看護師が何を考え、どのような実践を行っているのかを明らかにすることを目的に研究を行った。

研究方法: 質的記述的研究デザインを用い、5名のNICU看護師にインタビューを実施した。得られたデータから逐語録を作成し、目的を意識しながら分析を行った。

結果: 分析の結果、以下の5つのテーマが見いだされた。

- 1) 出生直後の一刻を争う勢いの中で、取り残されている家族に気づき、関わっていた。
- 2) これから続く病気との長い闘いを予測し、まずは家族が子どもをかわいいと思えることが大切と考え、支援していた。
- 3) 家族がわが子の手術を受ける覚悟を決めることができるよう、疾患や手術に対する情報を整理し、伝えていた。
- 4) 家族の思いを想像し、面会時に家族が安心できる環境を整えていた。
- 5) 出産前から家族への一貫した関わりが必要であると考えていた。

考察: 生まれたばかりの子どもに疾患があり、手術が必要であると説明を受けた家族は大きな衝撃を受ける。本研究により、看護師は手術をすることを前提として医療者が進んでいく状況から家族が取り残されていることに気がつき、関わっていたことが明らかになった。看護師は、子どもと家族のこれからという長期的な視点を持ち、家族に今必要なことを考え、実践していく必要がある。また、子どもを取り巻く環境や自分たちのケアがどのように見えるのかを家族の目線で想像し、大きな衝撃を受けた家族が面会時に少しでも安心できるような工夫を積み重ねていくことが重要である。

さらに、医療技術の進歩に伴い、新生児期に手術を必要とする子どもの家族の不安や悩みは出産前からあるにもかかわらず、家族への関わりが病棟という縦割りで一貫していない現状があり、今後は一貫した関わりを行う方法や体制づくりについて検討していく必要がある。